

【随 筆】

発信器から判って来た
タンチョウの意外な行動住 吉 尚
(釧路支部)

2月も中旬を過ぎると、ぼつぼつ日中はプラス温度になり、雪解けが進んできますね。でも道東ではこの時期からドカ雪が来ることがあり、要注意と言う時期でもあります。今朝はふわふわのパウダースノーが20 cmほど積まりました。釧路的には十分な大雪です。朝からせっせと除雪をしました。雪まみれの長靴のまま車に乗ったので、車の中まで雪まみれになり、運転席側の泥受けのゴムマットを剥がして雪を払いましたが、その時です。変なところから見たことがある紐が出ているのを見つけました。オヤ！引っ張り出すと、なんと、無くしたと思っていた双眼鏡が出て来たではありませんか。代わりの双眼鏡をもう買った後でしたから、今更出てきても！と言う気持ちもありましたが、これで古くて重い双眼鏡を引退させ、新しく買った双眼鏡を車内用に、出てきた軽い双眼鏡をフィールド用にすることにし、気分もすっきりです。



左から古い双眼鏡、新しく買った双眼鏡、落としたと思っていた双眼鏡

さて、発信器を取り付けたタンチョウのその後ですが、意外の連続で大変面白い情報が得られています。残念ながら現在発信器が付いた個体は1羽だけです。こんな面白い情報が得られるなら、今更ながら装着早々に落下してしまった2台の発信器の情報が得られなかったのは大

きな損失だったと思いました。それでも残った1台でも十分面白い情報が得られています。まずは2021年に発信器を装着したタンチョウの行動です。2021年の11月にサロベツを出て浜頓別まで行き、約1カ月間ここに滞在した後に2泊3日で湧別、津別を経由して阿寒湖の上空を飛び越え、鶴居へとやって来ました。この個体（足輪番号426）と前後して、今回発信器を付け追跡している個体（足輪番号429）が鶴居で観察されていることから、同じようなコースを取って飛来したものと考えられていました。足輪番号426は春になって、3月20日の9時に鶴居を出て、来た時と同じようなコースを飛んで15時には興部に到着。ここで1泊して22日の昼頃には浜頓別に飛来。24日10時に浜頓別を出て14時には兜沼に到着しています。そしてここで発信器をむしり取って落としてしまいました。どうもこの発信器が付いていると繁殖期には邪魔になると言うことのようにです。発信器がもう少し小さくなると良いのですが、ソーラー発電機とバッテリーを積むとこんな大きさになるようです。でも、この発信器も韓国製で、日本ではこんなものさえ作れない国になってしまったことを皆さんは知っていましたか。電子回路自体はとても小さな物なのでしょうがね。技術の国日本なんて今や遠い昔の幻想なんですね。愚痴はさておき、この発信器は幸い乾燥した畑に落ちました。それで信号を頼りに探して回収されたのです。そしてこの発信器が今回追跡している発信器です。2022年に買った2台の発信器は共に信号が取れていた時に、装着したタンチョウがいた水路の水の中に落ちたようで、2台ともに落ちると同時に信号が途絶えてしまったので回収はできませんでした。2羽同時に捕まえたのは良いのですが、この2羽にひとりで発信器を取り付け、放鳥するということになると、早く済ませようと焦りますから、少し無理があったのではないかと私は考えています。でも取り付け経験者は他にいませんから仕方がなかったのです。何とかこんなこともできる経験者を増やしていかなければならないのですよね。野生動物を取り扱ってみたいと思っている若者はいるのですが、これだけでは食べてはいけません。私のように年金生活者なら何とでもなります。今や人生100年時代です。貴方ももう一花咲かせてみませんか！

さてさて、今回追跡している個体（429番）は11月にサロベツを出て興部まで来ました。予想ではこの後湧別、津別を経て鶴居に来るものと考えていましたが、予想に反してここで動きを止め、興部川の川の中に2カ月以上居付きました。1月20日を過ぎても動きません。どうや

らここで越冬か？と思っていましたが、またもや予想に反して1月27日午前11時になって突然動き出しました。滝の上町の東側を通り、13時には浮島峠の東側を越え、石狩川源流部へ。大雪ダムの東側を16時に通り、沼の原あたりで大雪山を越えて、今度は十勝川源流部へ出ると、トムラウシ、サホロ、屈足の上空を越えて、十勝川と音更川の合流部に着いたのは18時ごろです。この時期の18時と言えはもう真っ暗でしょうね。月は出ていたのでしょうか？そしてこの日はここで1泊です。さてこの間の飛行状態ですが、飛行高度は1,700 mで時速50~70 kmと記録されています。この間のこの地域の風向きや風速が判ると面白い情報が得られそうです。何よりなぜこの日を選んだのか？には大変興味がありますが、天候、気圧配置、風向き、風速など、鳥が「この日」と決した条件があるのでしょうか。今後はこんな条件も知りたいものです。翌日は十勝川を下り札内川との合流点で1泊しました。そしてその翌日の29日のことです。11時頃飛び立つと十勝川の河口部付近まで飛行し、ぐるぐると飛行した挙句に下頃辺川（したころべかわ）上流部に良さそうな場所を見つけたのでしょうか。ここで3月7日までは確かにこの辺りで暮らしています。私は3月4日に下頃辺川上流部に行って見ました。残念ながら発信器を付けた個体には出会えませんでした。2ペアのタンチョウを見ることができました。帰って発信器の位置情報を見させてもらった所、私が左の農家かと目星を付けた所で2羽のタンチョウを見たのですが、発信器を付けたタンチョウは右側の農家周りにいたようでした。

ここから見てきたのは、越冬地の選択が親から子へと伝えられ、この成功体験が継承されていくものと思っていた我々の予想に反して、かなり自由に、自分で考えて選んでいくのだと言うことです。この個体はサロベツで繁殖し、最初の冬は親に付いて鶴居まで来たのでしょうか。そして2年目の秋です。普通、釧路や根室で繁殖した若鳥は若鳥だけで5羽、10羽と群れを作り越冬しながらペアの相手を見つけます。でもサロベツには群れる若鳥はいません。それで、単独行動をしていたこの鳥が無双網にかかり足輪を付けられたのでしょうか。こうして単独で越冬地へと行くことになりますが、やはり単独では心細いので成鳥ペアに付かず離れずしながら、昨年親鳥が連れて行ってくれた越冬地に飛来たものと思われます。このことで、自分だけで越冬地への移動の成功体験をする。そうすると自分の判断による行動に自信がついてきますよね。そして翌年（この冬です）、もう成鳥ですから、自分で考え、自分で越冬地を決めていく、と

言うことだと考えるのが妥当でしょう。越冬地は阿寒鶴居からなかなか変わらないのでは、と思っていましたが、そうではありませんでした。サロベツまで飛行することで北海道を広く観察できますよね。また上空1,700 mから見下ろす景色はどんな景色なのでしょう？我々が思っている以上に広い景色を眺めることができるのは間違いないでしょう。そして、そんなタンチョウなら、かなり自由に行き先を変えることができても不思議はありません。そう考えると、今後サロベツで繁殖する個体が増えると、南下するルートも、天塩川沿いを南下し上川盆地を経て石狩川に沿って南下する個体も出て来るでしょうし、日本海の海岸沿いを増毛辺りまで南下して石狩川下流部へと飛行する個体も出てきそうですね。そうすると胆振日高で越冬する個体が増え、さらには本州へと行く個体が出そうな気がします。そしてもうひとつ、タンチョウがサロベツで繁殖を始めたのは10年ほど前からです。今後10年もすればさらに遠く、サハリンでタンチョウを見たと言うニュースが流れ、繁殖個体も出てきそうな気がします。ここまで来るとタンチョウも「誰もが認める渡り鳥」と言うことになるでしょう。ただ、そうなる前に、早くプーチンが倒れてもう少しロシアとの交流が盛んになることを祈りたいですね。話をタンチョウに戻しますが、こんなタンチョウの生態調査は面白いものですよ。この歳になってもワクワクが止まりません。

3月9日に未練がましく、また下頃辺川まで行って見ました。でもこの日も私には発信器付きのタンチョウは見つけられませんでした。先日見たのと同じと思われるタンチョウのペアは簡単に見つけることができました。このペアはもう巣作りのまねごとを始めていました。とても巣を作る環境ではなさそうな場所で巣作りのまね



もう発情期ですから頭の赤い所は最大に

ごとをするなんて。私も初めて見たのですが、繁殖期に入ると若い鳥は巣を作る行動や抱卵する格好をしたりしながら、徐々に発情が進んで本当の産卵へと進んでいくものなのですね。こう考えると繁殖前期に「こんなところで！」と驚くようなところで抱卵のまねごとをする個体を見ることがある理由が判ったような気がしました。生態学は観察に勝るものはないようです。そしてもうひとつ、この日はもうガンの大群が飛来していました。でもいつも見る十勝川河口に近い所はまだまだ雪の平原でガンの姿はありません。丘陵地が平野へと落ちる所には湧水が出る場所が多く、あまり広くない畑でもたくさんのガンが見られました。タンチョウも湧水が多く冬でも凍結しない小川がある場所が、少数ずつのタンチョウの越冬地になっています。こんなこともあって、タンチョウの総数カウント調査はますます難しくなっているのですよ。

3月11日に鶴居村の鶴見台給餌にタンチョウを見に行ってみました。するとあの426番の足輪が付いたタン



寒さが緩むとサイレージなどに集まるタンチョウが増えます



3月11日に見た426番

チョウがいました。兜沼で繁殖が上手くいかなかったのでしょうか？ヒナはいないように見えました。でも、もう3月中旬、すでに子別れしていても不思議ではありません。あと10日もすればまたサロベツへと、昨年と同じようなコースを経て帰って行くのでしょうか。

〈句題〉 名残雪

「なごり雪

ふれるそばから

消えにけり」

「なごり雪

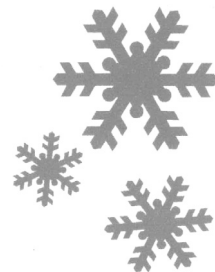
雫となりて肩ぬらす」

「なごり

雨垂となりて

窓あらふ」

(室蘭市 白波瀬 稔歳)



〈川柳〉

鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス

徳川家康

売れぬなら殺してしまえホルのオス

農水大臣

〈都々逸〉

(現代漢詩)

日本列島

労働意欲

気温上がって

組織合併獣医職

物価も上がる

入替玉突調整難

獣医の給料

新人即辞穴埋苦

いつ上がる

根本不足低待遇

(幕別町 豆作(まめさく))